



教師がつながる！
子どもがつながる！！
—新たな不登校を生まないために—



平成26年2月
岡山県総合教育センター

新たな不登校を生まない「未然防止」の取り組み



休み始めて3日までの初期対応、外部機関との連携など不登校への対応を頑張っているのになかなか不登校が減りません…



うちの学校は不登校の子どもがいないので、特別な対策は必要ないですよね…

- ・不登校になっている子どもやなりそうな子どもの対応に追われてはいませんか？
- ・「新たな不登校を生まない」という意識を学校で共有していますか？
- ・担当者だけで不登校対応をしていませんか？

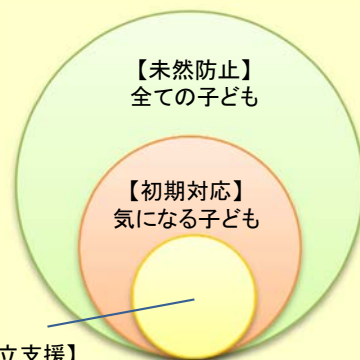
- ・過去に不登校を経験したり保健室利用が多かったりする子どもはいませんか？
- ・心理的なもろさや対人関係の難しさを抱えた子どもはいませんか？
- ・進学先で、不登校になっている子どもがいませんか？

どちらにも必要なのは「未然防止」の取り組みです

求められる三つの不登校対策

不登校への対策としては、どの学校でも次の三つの対策を整備し、全教職員で確実に実践することが大切です。

- 1 全ての子どもを対象とした「未然防止」
- 2 気になる子どもへの「初期対応」
- 3 不登校になっている子どもへの「自立支援」



【自立支援】
不登校になった子ども

「魅力的な学校づくり」で不登校の未然防止

不登校の未然防止では、全ての子どもたちへの広く、浅く、じっくりとした健全育成型の発想に立つ取り組みを、意図的、計画的かつ確実にを行い、子どもたちが喜んで通い、成長できる魅力的な学校をつくるのが大切です。取り組みでは、次の二点を心がけて「集団づくり」や「授業づくり」を進めていきます。

- ・学級や学校をどの子どもにとっても落ち着ける場所にしていく(→「居場所づくり」を進める)
- ・日々の授業や行事等の中で、全ての子どもが共に活躍できる場面を実現する(→「絆づくり」を進める)

「対人関係の改善」と「学習面の改善」

不登校の背景には対人関係と学習面でのつまずきが多く見られます。対人関係の改善としては、人と関わることへの苦手意識を克服させたり自己存在感・自己有用感を感じ取らせたりすることが大切です。学習面の改善としては、「分かる」という充実感や達成感を与えることや学習指導要領に示された基礎・基本を確実に身に付けさせることが大切です。これらのためには、他人と協力することができる活動の機会や場を設定することや学ぶ意欲を育む学習指導などが求められます。

参考：国立教育政策研究所(2012)「不登校・長期欠席を減らそうとしている教育委員会に役立つ施策に関するQ&A」
「生徒指導リーフ」

どのようにして「未然防止」の取り組みを充実させるの？



—「だれもが行きたくなる学校づくり」—

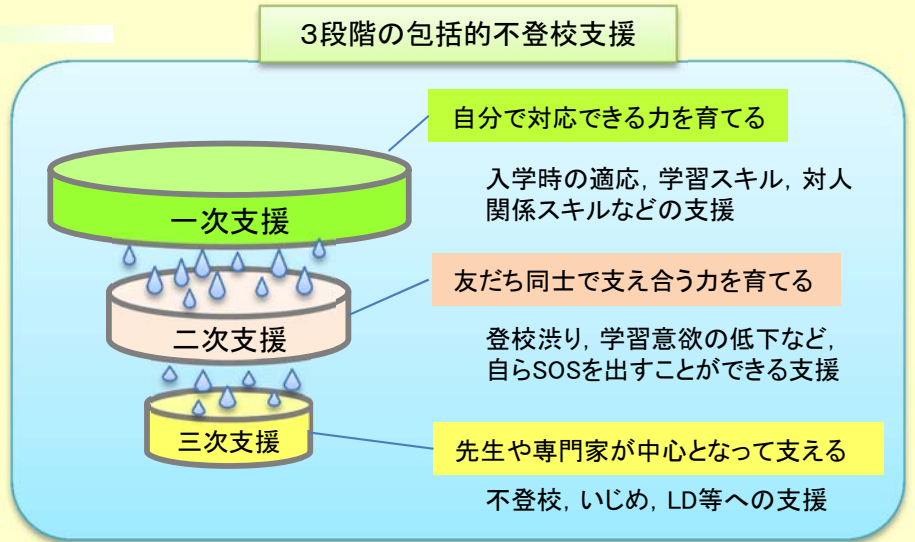


平成22年度から「だれもが行きたくなる学校づくり推進プラン」を全小・中学校で進めて効果を上げている総社市では、どのような不登校対策が行われているのでしょうか？

3段階の包括的な不登校支援

全ての子どもが自ら不登校を回避できるように「育つ」ための一次支援。友達を不登校にさせないために子ども同士の支え合いを生み出す二次支援。そして、不登校になり助けが必要な子どものための個別支援である三次支援。この三つの支援を全ての学校が包括的に進めています。

一次支援を充実させた上で、一次支援だけでは支えられない子どもを二次支援で、二次支援でも支えられない子どもを三次支援で、確実に受け止められるよう、全ての段階にある子どもを学校全体で支援できる仕組みをつくっています。



未然防止の取り組みにプログラム等を活用

全ての子どもの対人関係力の改善（一次支援）と気になる子どもを支え合う集団づくり（二次支援）を進めるために、「品格教育」「SEL*（社会性と情動の学習）」「ピア・サポート」「協同学習」の四つのプログラム等を活用しています。

また、学校環境適応感尺度（アセス）等でその効果を検証し、毎年取り組みの改善が図られています。

品格教育

品性・品格について学んで自己を振り返り仲間と磨き合うことを通して、良い習慣を形成するとともに規範意識を向上させる。

SEL（社会性と情動の学習）

ロールプレイングやグループワークなどの体験的学習、資料を用いた学習等を通して、自己や他者の感情（情動）の理解を基に、自己の感情を統制し、適切な表現をするなどの他者と関わるためのスキル、態度、価値観を身に付けさせる。

ピア・サポート

子ども同士が相互に支え合う活動を通して、思いやりのある子どもを育て、思いやりのある学校風土を醸成する。

協同学習

ペアやグループの活動における感情、役割、思考の交流を通して、良好な人間関係を築いて情緒的、社会的発達を促すとともに学習意欲と学習の生産性を向上させる。

* SEL = Social and Emotional Learning

連携による支援で個に応じた三次支援

不登校になった子どもを支えるために「スクールカウンセラーを活用したチーム支援」「欠席管理による早期介入」「小・中学校連携」等で三次支援を充実させています。初期対応から自立支援までの取り組みが担任任せとならないように校内体制をつくり関係機関との行動連携を進めたり、個別支援計画や個別支援シートを利用して学年間や校種間での情報連携を行ったりすることで、課題を抱えた子どもへの継続的な支援をしています。

子どもが「育つ」取り組みを充実させることです。そのポイントは…



子どもたちの基本的欲求を満たし、ソーシャルボンドを築きます

(社会的絆・関係の束)

未然防止の取り組みを進める上で、大切な二つの視点を基に考えましょう。

基本的欲求の充足

基本的欲求が満たされるから、学校に行くのではないかな？

影響力
(自己実現)

承認

交流

ソーシャルボンドの構築

ソーシャルボンドがあるから、学校に行くのではないかな？



人には、触れ合いたいという「交流」、認められたいという「承認」、自分の力を発揮したいという「影響力(自己実現)」という基本的欲求があります。特に、土台となる「交流」の欲求を十分満たすには、全ての子どもが1日の大半を過ごす「授業」で交流の機会や場を保障することが必要です。また、互いに認め合う体験を重ねるためには、個々の対人関係力を育むことも大切です。

- ・良質のコミュニケーションの場を大量に与える
- ・よりよい対人関係を築く力を育む

学校へは行くべきという義務感や友達といると楽しいと感じる魅力等は子どもと学校を結び付けるボンドの役割を果たしています。

ボンドがあれば学校に行く意欲は高まりますが、ボンドが失われると学校に行く意欲は低くなります。ボンドが数多くあればそれは束となり、ソーシャルボンド(社会的絆・関係の束)となります。

- ・子どもをつなぐソーシャルボンドを築く
- ・ソーシャルボンドを築く力を育む

育みたい力を明らかにし、プログラム等を活用する

取り組みを考える際には、現在だけでなく将来にわたって、子ども自身が人と交流しソーシャルボンドを築くために、学校としてどんな力を育みたいかを明確にします。育みたい力が明らかになれば、ねらいや理論、指導法が明確に示されたプログラム等を効果的に活用できます。

対人関係力の改善



支え合う集団の形成

良い習慣を形成する

【総社市の取り組み例】 品格教育

「挨拶」や「思いやり」などの品格や品性に関わる行為を月ごとのテーマとして設定し、ポスターなどで視覚に訴えたり、道徳などで考えさせたりして良い行動とは何かを伝えます。そして、子ども自身が目標行動を考え、実行する機会をつくり、繰り返し実践することで、良い習慣を定着させていきます。

社会性に関するスキル等を教える

【総社市の取り組み例】 SEL

自己や他者の感情の理解を基に、学級や学校、社会の中で必要となる対人関係の基本的スキルについて、その必要性やスキルのコツを学ぶ機会をつくり、子どもたちの日常場面を設定したロールプレイングなどの活動を通じて学ぶことが有効です。

支え合いを体験する場を設定する

【総社市の取り組み例】 ピア・サポート

SELで学習した情動と社会性に関わる基本的スキルを実際に活用し、互いに支え合う経験ができる活動を設定します。学校や部活動での人間関係の中で、あるいは学校行事や縦割り活動などを通して、子ども自身が試行錯誤しながら、成功経験を重ねることは、自己肯定感や自己有用感の育成にもつながります。

協同的な学習を取り入れる

【総社市の取り組み例】 協同学習

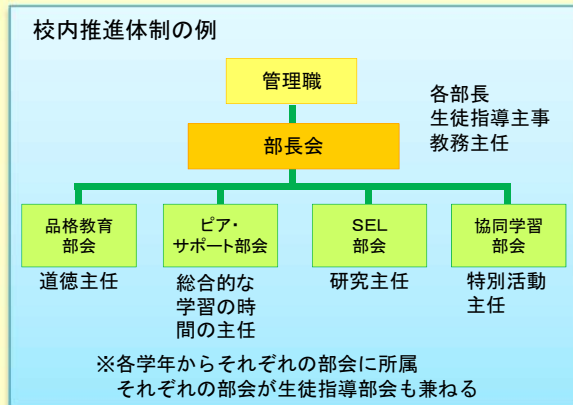
授業に、ペアやグループなどの交流の時間を取り入れます。まずは1単位時間に5分などの目安をもって始めます。そして、協同的な学習場面を設定し、学習に関わる思考の交流だけでなく、「共に学ぶことでできた」「分かった」といった感情の交流、進行役や発表役などを互いに体験し合う役割の交流を進めます。



全ての子どもが「育つ」取り組みを学校

全教職員参加型の校内体制をつくります

全教職員が不登校の未然防止の取り組みを主体的に推進できるように校内体制をつくります。一部の担当者のみで仕事が一任の場合でも後継者の育成や取り組みの継続性を意識して、仕事や役割を分担しておくことが大切です。



【役割の分担】

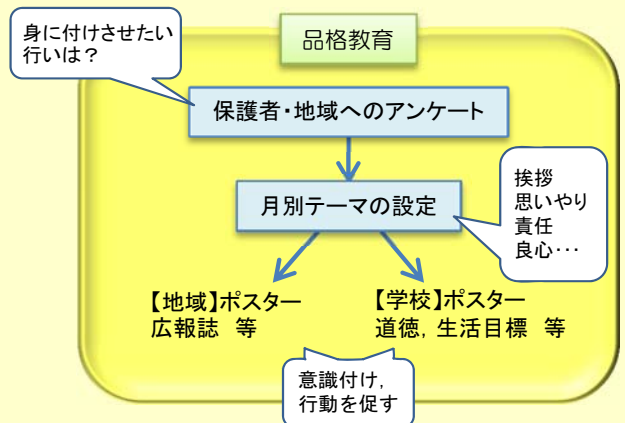
- 管理職** 取り組みのねらいを明確にし、リーダーシップを発揮します。
- 部長会** 教務主任や生徒指導主事などのミドルリーダーが中心となり、取り組みの骨格を明らかにします。
- 部会** 全教職員を各部会に配置し、取り組みについての情報収集、年間計画、取り組み内容の決定などを具体化し、実践を推進していきます。

【構成メンバーの工夫】

取り組みに関連している分掌の担当者に関連の部会に配置し、学年の偏りがないようバランス良くメンバーを構成します。このことにより、教育課程との擦り合わせや学年間の連携を効果的に進めることができます。

▶▶ 地域の力を活用することで効果を高める

「保護者や地域の意見を聞き、取り組みの計画に反映する」「取り組みの成果や課題を公開し保護者や地域と共有する」「指導補助やゲストティーチャーとして協力を依頼する」等、保護者や地域と共に共通の願いをもって取り組みを進めることが効果を高めます。また子どもが育つためには、校種を超えて同じ中学校区内の学校・園が情報交換をし、共通の目標に向けた取り組みを進めていくと更に効果的です。



不登校未然防止のサイクルを回します

効果的な実践を継続するために、校内体制や

ねらいの 確認

全教職員での合意形成を行います。どんな学校にしたいか、どんな子どもに育ってほしいのかをしっかりと語り合い、取り組みのねらいを確認しましょう。年度初めには取り組みの基本的な考え方も確認します。

- ・新たな不登校を生まないための「未然防止」の取り組みは、全ての子どもに必要なことを共通理解
- ・不登校対策には「未然防止」「初期対応」「自立支援」が必要なことを共通理解

実態把握 原因分析

日常の観察などの教職員側からの情報だけでなく、子どもや地域・保護者等へのアンケートなどを基に、多面的に情報を集約することで実態を把握し、理論に基づいて仮説を立てて原因を分析します。

- ・不登校者数だけでなく、長期欠席、保健室利用、遅刻・早退等のデータも活用
- ・学力・学習状況調査や、アンケート、心理検査等のデータを活用

全体で意図的，計画的に進めます



取り組みの質を保証するのは研修です

生徒指導では，学校全体がチームとしてぶれのない指導を行うことが重要です。プログラム等を活用する利点として，全教職員がプログラム等のねらいを知り指導内容を具体的に把握することで，日頃から同じ基準で指導できることが挙げられます。研修を通して取り組み内容に対する理解を深めることは，教職員間の指導のぶれを修正し，学校全体で未然防止の取り組みを確実に進めることにつながります。

▶▶ 年度当初に取り組みの基本的な考えを共通理解する

取り組みが継続し，効果を上げるためには，取り組みのねらいや必要性等の基本的な考え方を全教職員で確認し，共通理解を図る研修が必要です。

年度当初の確認事項例

- ・ 取り組みのねらい
- ・ プログラム等の基本的理解
- ・ 校内体制づくり
- ・ 年間の指導計画，研修計画 等

▶▶ 意図的，計画的に進める

研修は，理論的に理解するための研修と理論を具現化して実践の質を高めていく研修に大別できます。取り組みの進行具合やその年度の教職員の構成によって，必要な研修内容は変わっていきます。また，生徒指導や教育相談の基本的理解を進め，学校全体で生徒指導力の向上を図る視点も必要です。研修内容をバランスよく計画することが実践の充実につながります。

研修内容例

- 理論的な理解を進める研修
 - ・ 不登校についての基本的理解
 - ・ プログラム等の基本的理解
 - ・ 生徒指導・教育相談の基本的理解 等
- 実践の質を高める研修
 - ・ モデル授業の公開
 - ・ 同じ中学校区での授業研究
 - ・ 先進校視察 等

▶▶ 研修形態を工夫する

全教職員が集まり，まとまった時間で行う研修だけでなく，対象者を絞り短時間で焦点化した研修を重ねることも有効です。実践を積み重ねながら理論と結び付け，互いに学ぶことが取り組みの質を高めていきます。

研修形態例

- ・ 全教職員研修
- ・ 部会研修
- ・ 転入者対象研修
- ・ 他校との合同研修
- ・ 県総合教育センターなどの関係機関を活用した校外研修 等
- ・ 学年研修
- ・ リーダー研修



研修を活用して，定期的に取り組みを振り返り，改善を図りましょう。

計画策定 実践

一人一人の子どもの3年間や6年間，9年間を見通した長期的な取り組みであることを基に，計画を策定します。保護者や地域，地域内にある学校等との連携も視野に入れます。

- ・ 短期・中期・長期での指導目標と取り組みの計画
- ・ 取り組みについて，他での実践事例等の情報収集
- ・ 具体的な取り組み及び指導基準の決定
- ・ 取り組みの周知徹底
- ・ 校種間連携や地域，保護者との連携

点検 検証

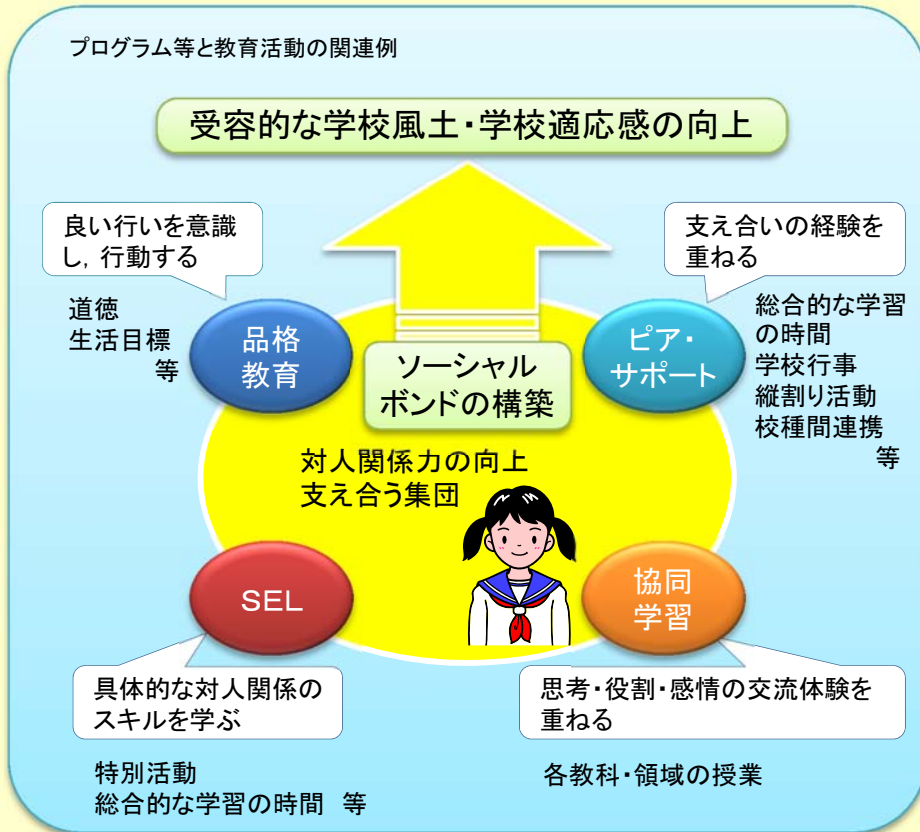
取り組みのねらいを基に，柔軟に体制や方策を見直すことが大切です。月ごと，学期ごと，年度末などの時期を示し，定期的に見直す機会を設定し，学校の実態に合う取り組みになるように改善します。

- ・ 取り組みの記録，教材，学習指導案の整理
- ・ 達成状況や取り組み状況の確認
- ・ 状況変化が把握できるようなデータの収集と分析
- ・ 学校評価等で，保護者や地域の評価の収集と分析
- ・ 課題と成果の明確化と改善策の検討

教育課程に位置付け、日常的な取り組みにします

未然防止の取り組みはすぐに効果が現れるものではありません。指導の積み重ねによって子どもが育つことで、子ども同士が支え合う学校風土が定着していきます。プログラム等を「特別に行っている」段階から「日常の中に取り込まれた」段階になるまでの中長期的な見通しをもって、取り組みを根付かせましょう。

プログラム等と教育活動の関連例



▶▶ プログラム等を試行する

取り組みの構想ができれば、試行をします。全て一斉に取り入れるのではなく、必要性の高いものや取り組みやすいところから先事例等を参考に段階的に取り入れます。理論や指導法の研修を進める中でそれぞれのプログラム等の特徴が分かり、教科や領域とのつながりが見えてきます。

▶▶ 教育課程と関連付ける

学校の教育活動には対人関係力の改善に結び付く活動が数多くあります。試行を基に、プログラム等を指導法の一つとして、どの教育活動で取り入れることができるかを考えます。教育課程と関連付けることで、毎年確実に指導を積み重ねることができま

▶▶ 活動を効果的に関連付け、年間計画を作成する

スキル学習の基本的な流れは「良いモデルを見る→望ましい振る舞いのコツを知る→練習してみる→日常で繰り返し使いプラスの反応を得る→定着」です。対人関係力を改善する取り組みでは、それぞれの活動を効果的に配置し、繰り返し学び、体験できる場を準備します。また、教育課程に位置付け年間計画を作成することで、各学年での子どもの育ちのつながりが見えてきます。

▶▶ 育んだ力を生かし、日常の指導の充実を図る

取り組みが継続しプログラム等が指導の中で定着してくると、子ども自身が育んだ力を日常の中で生かし始めます。育まれた力を活用し、子どもが主体的に活動できる機会や場を設定することが必要です。

注意

「プログラム等を活用すれば未然防止」ではありません

【プログラム等を活用した指導の現状】

- ・余裕があるときに指導をしています、継続した取り組みになっていません
- ・必要性のあるときに使っています
- ・その場限りの指導になりがちです

アンケートからは、「子どもたちがつまづいているから導入する」という対応型の考えでプログラム等を活用している実態が見えてきます。しかし、これでは「プログラム等の効果がすぐに見られない」「表面上の問題が収束したので活用を終える」などの理由で一時的な活用にとどまり、子どもが育つ取り組みにつながりません。

同じプログラム等の活用でも、ねらいは「未然防止」であることを意識し、3年間、6年間、9年間といった長期の見通しで取り組むことが必要です。

「つながり」で、不登校未然防止

【育ちがつながる】

教師がつながる



学校全体で不登校未然防止の**推進体制**をつくり、全ての子どもを対象にした子どもが**育つ支援**を進めます。**プログラム等**を活用した取り組みの核を決め、**教職員が研修で共に学び合い共通理解**をしながら取り組みます。

子ども自らが不登校を回避、解決できる力を育むことは、現在だけでなく将来的な不登校を防ぐことにつながります。3年間、6年間、9年間の子どもの成長や発達を見通し、長期的な視点に立った取り組みを進めます。



子どもがつながる



【地域とつながる】

地域を支える社会の一員として、望ましい子どもたちの姿を保護者や地域と共有します。保・幼・小・中・高といった異校種の学校・園やその他の関係機関等と連携した取り組みが進むと更に効果的です。

居場所であり、絆を育む場としての**集団**を育てます。不登校を生まない、友達を支え合う集団や不登校から復帰できる**安心感のある学級**をつくる、その中心となる場は**授業**です。

平成25年度岡山県総合教育センター所員研究（共同研究：生徒指導）
「不登校を減らすために有効な支援に関する調査研究—総社市の取り組みから見えてきたもの—」
研究委員会

- 指導助言者
広島大学大学院教授 栗原慎二
- 協力
総社市教育委員会
- 協力校
総社市立総社中央小学校 総社市立常盤小学校 総社市立池田小学校
総社市立清音小学校 総社市立総社西中学校
- 研究委員
岡山県総合教育センター
生徒指導部長 石井孝典
指導主事（主幹）赤木陽一郎
指導主事 平田朝一 岡本邦尚 小林寛 大久保三月

平成26年2月発行 教師がつながる！ 子どもがつながる!!
—新たな不登校を生まないために—
【編集兼発行所】 岡山県総合教育センター
〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川7545-11
TEL (0866)56-9101 FAX (0866)56-9121
URL <http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/>
E-MAIL kyoikuse@pref.okayama.lg.jp